

【問題一】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人類にとって、感染症との戦いは長い歴史である。古代エジプト王朝のラムセス五世のミイラには、天然痘由来のかさぶたの痕⁽¹⁾セキがあるという。黒死病と呼ばれたペストは中世ヨーロッパで猛威を振るい、人口の三分の一から二分の一が失われた。比較的最近でも、一〇〇年前にはスペイン風邪が世界的に流行した。一九一八年から一九二一年にかけ、第一次世界大戦と相まって世界中に広まったスペイン風邪は、世界中で数千万人、日本でも四〇万人という死者を出したとされる。しかもその後もボク減⁽²⁾されたわけではなく、香港型やソ連型に変異し、今日も続くインフルエンザに姿を変えているという。

こうした過去の感染症の歴史を踏まえつつ、経済や経営の未来を考えることには意味がある。例えば、経営学者たちが集まった書籍では、天然痘を例にしながら、ワクチンができれば終息に向かうとしながらも、それまでは混乱が続くとして経営の未来を考察している。同様に、経営学者の清水剛は、スペイン風邪とコロナ禍を比較しながら、死の影が存在していた時代と弱まった時代において、経営や消費行動がどのように変わってきたのかを検討し、コロナ後の世界を見据えようとする。さらに会計学者の國部克彦⁽³⁾たちは、ペストの時代の国家像を紹介しつつ、コロナ禍の中でちょうど始まった神戸大学バリュースクールの経験を踏まえ新しい価値の創造方法を模索する。

ここでは、この消費社会について、統治性という概念から検討するとともに、マーケティングとの接続についても確認していくことにしたい。

A M・フーコーは、これまでの西欧社会における三つの感染症の流行を取り上げ、時代ごとに管理の様式が異なってきたと指摘する。統治性という概念は、こうした感染症に対する社会の対応の仕方と関係している。

一つ目は、中世末までのハンセン病患者の排除である。この排除は、法や統制といった法的総体と儀礼的・宗教的総体によってなされ、ハンセン病にかかっているものとつかっていないものの間に線を引く二項区分的な分割をもたらした。ハンセン病自体は、今日では感染力も低いことがわかっているが、中世においては非常に恐れられた。当時考えられた管理の様式は、「社会の外への投棄、追放⁽⁴⁾封じ込め」である。ハンセン病患者を街から排除し、存在しないものとして扱うこと、そうすることで社会そのものが維持されてきた。

二つ目は、ペストである。ペストは典型的な感染症であり、特に中世から一七世紀にかけて統制されてきた。しかし、その管理の様式はハンセン病の時とは異なっている。ペストでは、発生している地域や都市を文字通り基盤制にし、人々に対して統制を課す。その基盤目から、いつ、どのように、何時に出てよいか、自宅では何をしなければならぬか、どのような食物を摂らなければならぬかが細かく指示される。人々は全員毎日のように視察官の前に姿を見せ、自宅も視察官にみせることが強制される。「外出が禁じられ、違反すれば死刑」「住民は真実を言うべし、違反すれば死刑」である。この管理の様式は規律的であり、人々を訓練する。

そして三つ目は天然痘であり、一八世紀からの接種実践が取り上げられる。天然痘もまた感染症であり、ペストと同様に規律も課されるが、先の二つと

は異なりワクチンがすでに存在し、対応に大きな変化がみられる。重要なことは、何人が天然痘に罹⁽⁵⁾っているか、その人々は何歳か、どのような影響が出ているか、死亡率はどの程度か、病変や後遺症はどの程度か、接種を受けた場合のリスクはどの程度か、接種を受けたのに天然痘に罹ってしまう蓋然性はどのくらいかといった、人口一般における統計上の傾向と成果である。このとき、ハンセン病のような排除や、ペストのような防疫隔離の問題でもなく、感染症や風土病を食い止める医学キャンペーンが問題となるとされる。

今回のコロナ禍の場合はどうだったであろう。もちろんいずれの特徴もみられたが、その中でも特に、天然痘にみる管理の様式がより徹底され、ワクチンが開発される前からさまざまな医学キャンペーンが展開されてきた。日々報道されていたように、最も重要なのは地域ごと、国ごとの患者数の増減であり、PCR検査の陽性者数や死亡者数、さらには過去と比べて超過死亡率が日々モニタリングされている。患者が増えれば緊急事態宣言となるが、この宣言はハンセン病やペストの時代とは異なり、人々を強制的に排除・隔離するわけではない。店舗への要請も命令も、従うかどうかは店舗の自由である。患者ですら、収容されたホテルを勝手に抜け出て歩き回ることができてしまう。人々の動きを止めるために、国を挙げた医学キャンペーンが展開されるとも、給付金や補償金が不可欠となり、大規模な財政出動や金ユウ⁽⁶⁾緩和が行われる。

さらに、経済的な配慮は、市場原理がもはや特定の主体による管理の様式を超え、社会の隅々にまで浸透していることと無関係ではない。市場原理は経済の再開を強く切望し、緊急事態宣言や人々の移動制限を難しくする。人の命は、今日では経済の重要性と相克し、人の命と自由も天秤にかけられる。直接的に命が大事だというだけでなく、自由が制限され経済が止まることで人の命が損なわれる可能性までを含め議論の対象となる。

最後の三つ目の管理の様式は、統治性や生権力、あるいは生政治とよばれる。統治性では、誰かが強権を振るうというわけではない。人々は自由に振る舞うことができるが、その具体的な道具立てとして市場や市場原理が重要になる。すなわち、統治性では市場や市場原理を通じて人々が自由に振る舞うことを奨励し、支援する。そしてその自由を通じて、権力は人々に作用するのである。

統治性とは、人々の振る舞いを導く(the conduct of conduct) 今日的な権力の形である。日常的な用語としての権力は、人々の意に反した強制力を指すのに対し、パノプティコン・モデルとしてよく知られるように、フーコーは人々の主体性そのものを作り出している権力に注目し、これを規律訓練型の権力として捉えようとしてきた。規律訓練型の権力では、権力の志向性が人々に内面化される。主体として自由に振る舞うことができるのは、そもそも権力によってそう振る舞うように訓練されてきたからである。先にみた感染症への対応は、それぞれ一般的な意味での権力と規律訓練型の権力に対応している。ハンセン病では、患者の意に関わらず排除が前提となる。ペストでは厳しい罰則は伴うものの基本的には監視されているだけであり、人々は訓練されて自律的にペストに備えるようになる。

規律訓練型の権力を踏まえつつ、統治性では別の形の権力が提示される。規律訓練型の権力は、規律や訓練という言葉が示すように、もともと闘争や戦争といった戦いの世界観のもとで考案されてきた。また、個人の主体化が重要な問題とされ、具体的な国家や組織における権力についてはあまり議論され

てこなかった。これに対して、今日の先進国の多くの国家や政府の諸政策は、戦争のメタファーではなく、むしろ逆に平和のメタファーによって捉えることができる。死を伴う権力ではなく、人々の安全に注目し人々を生かそうとする権力こそが、今日の具体的な国家や政府を捉えるには有用であり、従ってそれは生権力とも表現される。規律訓練と統治性は決して排他的ではないが、異なる側面も有し、規律型社会に変わる管理型社会を提示している。医療社会学者の美馬達哉は、コロナ禍を想定しながら、パノプティコン監視とモニタリング監視を分けて論じている。このとき、モニタリング監視では人々はモニタリングされることを承認し、自ら望んでいる点に一つの特徴がある。

統治性^Dのもとでは、権力の形は司牧的であるともされる。司牧的な権力は、根本的に善行を旨とする権力である。司牧は、羊の群れを導く。しかし、司牧は羊たちを強く追い立てるわけでないし、その内面に関与するわけでもない。羊たちは自由に振る舞う。司牧にとって、重要なのは羊一頭一頭ではなく、群れである。国家においては、個人一人一人が問題ではなく、統計技術によって集計される人口が重要な管理の対象となる。

統治性は、その権力の行使にあたり様々な道具を用いる。その一つだと考えられてきたのが、私たちがこれまで注目してきた市場や市場原理である。市場原理は、人々が市場において自由に振る舞うことを奨励する。そして自由な競争を通じて、より良い社会が形成されると考える。フリーコムの思想の中に統治なる概念が存在し、特に新自由主義と結びつけて論じられていることが広く知られるようになったのは一九九〇年代に入ってからだという。

市場や市場原理の導入では、国家や政府は人々に対して直接何かを強制するわけではない。さらに、市場に参加することについて、訓練を施すわけではない。逆に、市場原理の導入は、自然と人々の振る舞いを導くようにみえる。そこに利己的であれ利他的であれ利害を見出した人々が参加すれば、市場は活性化し、拡大していく。政府はできるだけ関与せず、統計情報を管理することによって間接的に市場の方向性を定める。この点では、いわゆる小さな政府を目指すという新自由主義の一つの形をみることができる。

ただし、大きな問題が生じた時には政府は直接的に強く介入もできるし、法的根拠が曖昧な部分にまで入り込んでくる場合がある。公益性という曖昧な部分は、今や国家の侵犯が常態化した。したがって、市場原理は人々の振る舞いを導く権力作用であり、それ自体に良いも悪いもないが、市場原理に無条件に賛同することは、当の作用が権力的で暴力的でもあることを見落とすことになる。権力である以上、そこには人々の意に反する強制力や、あるいはその権力によってふり落とされる人々の問題が生じるのである。

最初に紹介した國部たちは、カミュの『ペスト』を紹介しながら、「混乱の時期に、政府や企業あるいは学校のような組織に依存することは非常に危険であることに、気づくこと」が重要であると述べる。それは統治性の影響が強まった今日にあっても変わらない。

マーケティング研究では、マーケティングが交換を主題として拡張を始めて以降、当の交換を批判的に捉える視点は限られてきた。その一方で、とりわけマーケティングを制度として捉えるマクロ・マーケティング研究においては、規律訓練型の権力も含め統治性に関する研究がさまざまに行われてきた。例えば、インドのMBA教育システムの普及プロセスでは、西洋から導入された市場原理がMBA教育を通じて人々に内面化されていく過程が捉えられる。

さらに、やはりインドでは電子システムがBOP (Bottom of Pyramid) 市場に導入された結果、急激な市場化が生じた一方で二次的な貧困もまた作り出すことになったとされる。市場の形成は主体にも影響を与え、規律訓練とも相まって健康を意識し自らを管理する主体を生み出すとともに、消費行動について責任ある消費者を作り出す。その他、統治性は市場原理の導入という形でソーシャル・マーケティングや公共・非営利組織のマーケティングを後押しし、近年注目されてきた企業と顧客が一緒に活動するという共創の促進に対しても、消費者が新たな労働力として生産過程に巻き込まれている可能性を示す。マーケティング管理としても、統治性は従業員に影響を与えている。失敗に伴う罰の存在はいまでもなく、上司と部下との定期的なフィードバック面談などでは、規律を内面化させる「告白」の仕組みが駆使されていることが示される。

R・レイトンは、マーケティングをより広くマーケティングシステムとして捉え、持続的で経済的な交換の体系であり、人々やさまざまな実体が結びついたネットワークとして定義している。こうした交換の下では、人々は経済的な利益を最大化しようと自発的に行動する一方で、それはかならずしも最適な結果につながるとは限らず、特にマクロレベルでの社会的幸福を損なうリスクがある。先に述べたインドでの電子システムの導入は、一部の貧しい人々の市場参加を助けた一方で、そもそも電子システムにアクセスできない人々を除外して市場の中でみえないようにすることで、システムに参加できる人々の間の格差だけではなく、その外部により大きな格差を作り出すことになった。

マクロ・マーケティングにおける統治性に関する研究は、こうしたマーケティングシステムの主にネガティブな側面を明らかにしている。しかし、繰り返し述べてきたように、市場原理に良いも悪いもない。マクロ・マーケティング研究では、伝統的に、市場メカニズムは疎外を作り出すとみなされてきたとともに（批判的マーケティング学派とも呼ばれる）、一方で、社会開発のツールとしてもみなされてきた。統治性もまた、それが破壊をもたらすだけでなくあるという考えに基づいて批判の対象とすべきではないといわれる。そのマイナズ面とプラス面の両方を考慮する必要がある。

マーケティングシステムは、企業の「社会的利益のための活動」を促進し、経済的利益と社会的利益が両立する新しい道徳を生み出すともされる。統治性は、企業や人々に自由な選択を与えることでうまく機能するが、同時に自由な選択には行動の責任が伴う。このため、一度社会問題が重視されるようになると、企業は自らを守る手段として社会問題に対応するように促され、自然と方向付けられるようになるのである。

もちろん、このような企業の対応は必ずしも本格的なものではなく、自己正当化のための「不純」な側面を持つ。すなわち経済的利益と社会的利益が両立する新しい道徳とは、「本来的な」道徳とは異なった新しい道徳である。この傾向は、企業だけではなく消費者においても同じようにみることができる。環境や社会問題に責任を持つことを求める消費者は、同様のプロセスを通じて形成される。

水越康介、応援消費―社会を動かす力、岩波書店

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| (1) 痕セキ | ① 分析 | ② 積年 | ③ 化石 | ④ 奇跡 |
| (2) ボク減 | ① 打撲 | ② 牧草 | ③ 和睦 | ④ 遺墨 |
| (3) 金ユウ | ① 勧誘 | ② 郵政 | ③ 所有 | ④ 融点 |
| (4) 奨レイ | ① 礼儀 | ② 激励 | ③ 零細 | ④ 加齢 |
| (5) コ客 | ① 誇示 | ② 故事 | ③ 顧問 | ④ 個展 |

問二 傍線部A「M・フーコーは、これまでの西欧社会における三つの感染症の流行を取り上げ、時代ごとに管理の様式が異なってきたと指摘する」の内容を説明したものと**不適切な**ものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 中世末までのハンセン病患者に対しては、かかっているものとかかかっていないものを二項対立的に分別し、かかっているものは社会の内部に留まることが許されたが、かかっているものは、社会の維持のために帰属していた社会外への追放や特定の場所への隔離等の措置がなされた。
- ② 中世から十七世紀にかけて、ベストが流行した際には、病気が発生している地域や都市を基盤制りにして、外出の制限や自宅滞在時の約束事、摂取できる食べ物について等、子細な指示が出され、そのことについて、住民たちは頻繁に視察官からチェックを強制的に受けさせられた。
- ③ 十八世紀からの天然痘の場合は、すでに抗体ワクチンが存在していたため、罹患者の人数、年齢層、その影響や死亡率、病変や後遺症の程度、ワクチン接種に伴うリスク、接種後に天然痘にかかる蓋然性等、医学的な視点からの統計上の傾向と成果を収集することに重点が置かれた。
- ④ 今回のコロナ禍の場合には、ワクチンが開発される前から様々な医学的なキャンペーンが展開され、国ごと、地域ごとの患者数の増減、PCR検査後の陽性者数や死亡者数、過去と比較した超過死亡率等がモニタリングされ、それらの報道をもとに人々は自分たちの行動を判断した。

問三 傍線部B「バノブティコン・モデル」の説明として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① いつも誰かに監視されているかもしれないという意識を、潜在的に対象者が持たされる監視システム。
- ② 権力者によっていつも監視されていることによって、自然災害等から効率的に身を守る監視システム。
- ③ 権力者から命令を受けた人間が、定期的に監視対象者の行動を確認するために見巡りに来る監視システム。
- ④ 権力者が監視していない体を装いながら、部下等から提供される情報によって対象者を監視するシステム。

問四 傍線部C「メタファー」とあるが、修辞技法における「メタファー」の文章として適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 彼女の父は北海道出身だ。
- ② この犬は熊のようだ。
- ③ 人生とは一つのドラマだ。
- ④ 生卵は最低三個必要だ。

問五 傍線部D「権力の形は司牧的であるともされる」の説明として最も適切なものを次の①～④から選択し、番号をマークしなさい。

- ① 個人一人一人の嗜好や要望等に常に注意が払われているため、統計的な手法によって収集された人々全体の傾向や特質性等は無視してよいこと。
- ② 統計的な手法によって収集された人々全体の傾向や特質性等には例外が多いため、個人一人一人の嗜好や要望等について常に注意を払うこと。
- ③ 統計的な手法によって収集された人々全体の傾向や特質性等よりも、個人一人一人の嗜好や要望等が社会を統治するためには重要視されること。
- ④ 個人一人一人の嗜好や要望等よりも、統計的な手法によって収集された人々全体の傾向や特質性等が社会を統治するためには重要視されること。

問六 傍線部E「小さな政府」の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 政府や行政の民間への介入をできるだけ少なくしようとする政府。
- ② 政府や行政の一般予算の支出をできるだけ少なくしようとする政府。
- ③ 民間による支援や援助だけで政府や行政を運営しようとする政府。
- ④ できるだけ少ない人数の大臣で政府や行政を運営しようとする政府。

問七 傍線部F「カミュの『ペスト』とあるが、フランスのノーベル賞作家・アルベール・カミュの小説『ペスト』と並ぶカミュの代表作の日本語の書名として適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 『異端者』
- ② 『異邦人』
- ③ 『訪問者』
- ④ 『異郷人』

問八 傍線部(あ)～(う)の語の日本語の意味として最も適切なものをそれぞれ①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|-------------|------|------|------|------|
| (あ) フィードバック | ① 圧迫 | ② 個人 | ③ 事後 | ④ 評価 |
| (い) アクセス | ① 近似 | ② 接近 | ③ 僅差 | ④ 近接 |
| (う) プロセス | ① 過程 | ② 結果 | ③ 熟成 | ④ 原因 |

問九 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ 第一次世界大戦期に広まったスペイン風邪は、世界中で数千万人という大きな数の死者を出す大惨事を招いたが、今日に至っても一部では勢力を維持しており、香港やロシアなどの局地においては、インフルエンザに変異してその季節になると猛威を振るい続けている。

ロ コロナ禍における緊急事態宣言の発令や人々の移動制限が難しかったのは、今日の社会では特定の主体による管理の様式を超えてしまっており、市場経済の原理が社会の隅々まで行きわたってしまっているため、経済活動の再開が強く望まれたからである。

ハ M・フーコーは、人々の主体性を作り出している権力に注目し、主体として自由に振る舞うことが可能であるのは、権力の志向性が主体の中に内面化されることによってそのように振る舞うように訓練されてきた、いわゆる規律訓練型の権力によるものであると分析した。

ニ R・レイトン^ニは、マーケティングをより広範なマーケティングシステムの失敗として批判的に捉え、持続的で経済的な交換の破綻した体系であり、人々やさまざまな実態が結びつかない、実社会においては普及の難しい見せかけのネットワークとして定義している。

【問題二】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

^A 今あらためて、^B「自然」が問われている。

二一世紀に入つてのわれわれをとりまく思想状況は、前世紀初頭の思想の極北が見ていたものが「神の死」ということであるとすれば、今世紀のそれは、「人間の死」「人類の死」ということであるともいわれる。何かしら人間にまつわるもの、あるいは人間そのものの死が、終わりが予感されているということである。

こうした物言いはそれだけを安易にふりまわすならばそれこそ「思想の死」にはかならないが、その予感が、われわれの住むこの地球という天体がほんのちっぽけな有限でしかなかったこと、またその地球の環境破壊が今やとりかえしのつかないところまで来ているということの否応ない認識からきていることは事実である。

そしてその予感は、それがあればすべてが根拠づけうるというような絶対の根拠の不在の感知として、きわめて相対主義的な思想状況となって現れてきている。今、自然が問われ直されているのも、これまで人間の理性によつて有意味的に秩序づけられてきた「コスモスとしての自然」の解体が、精神的・物理的なさまざまなレベルで、きわめて危機的に進行しているという認識においてであろう。その意味で、今あらためて自然が問われているのである。ところで、こうした議論の前提としてまず確認しておかねばならないことは、自然とは、それがいかなる自然であれ、われわれによつて語られる自然は(むろん「コスモスとしての自然」もふくめて)、それぞれの自然観・自然認識において捉えられ語られた自然であるということである。自然という何ものかを、人間の側がそこで生きるべく、どう把握し、どう彩色したかという、何ほどかは比喩化・仮構化し、物語化して語っているということである。当たり前といえば当たり前のことであるが、そのことはくりかえし確認しておかねばならない。自然それ自体は(ましてやその総体などは)、われわれにはついに見知らぬ向こう側としてあるという、知の限界、無知の知が、まずもつての前提である。

しかし「真理とは、ある種の動物、生きものがそれなしには生きていけないかもしれない誤謬^{ゴ・ガ・ミョウ}のことだ」(ニーチエ)とすれば、われわれに課せられていることは、それが「誤謬」であるかもしれないということをつねに留保しながら、そこにあって「みずから」が生きうるような「真理」(「誤謬」)を見だし、見あらためそこに生きるということであろう。自然とは、つねにそうした近^Bづき方しかできない何ものである。

むろんそれは、日本人にとつての「自然」においても同様である。

自然に「おのずから」とルビを振つたのは、周知のように、名詞「自然」は *shizen* の明治翻訳語であり、それまで日本語(中国語でもあるが)では、「自然」は「偶然」や「突然」と同じ副詞として「おのずから」と同義に使われていたという事情に基づいている。

そこにすでに、自然という向こう側をとりだすときのこちら側の捉え方の問題がふくまれているのであるが、いずれにしても当面ここでは、そうした日

本語の古今の用法にしたがって、「自然」を、副詞としての「おのずから」という、ある働きの形容と、その働きによってのみ成ったものとしての「自然」、名詞「自然」とを特に分けずに考えておくことにしよう。

つとに西田幾多郎は、こうした日本的「自然」について、日本文化の特色として次のように指摘している。

私は日本文化の特色と云ふのは、主体から環境へと云ふ方向に於て何処までも自己自身を否定して物となる、物となつて見、物となつて行ふにあるのではないかと思ふ。己を空うして物を見る、自己が物の中に没する、無心とか自然法爾とか云ふことが、我々日本人の強い憧憬の境地であると思ふ。

（『日本文化の問題』）

あるいは九鬼周造は、日本人の道德の特色として次のように指摘している。

日本の道德の理想にはおのづから自然といふことが大きい意味を有つてゐる。殊更らしいことを嫌つておのづからなところを尊ぶのである。自然などところまで行かなければ道德が完成したとは見られない。その点が西洋とはかなり違つてゐる。いつたい西洋の觀念形態では自然と自由とはしばしば対立して考えられている。それに反して日本の実践体験では自然と自由とが融合相即して会得される傾向がある。自然におのづから進み出るものが自由である。自由とはキユウ屈なさかしの結果として生ずるものではない。天地の心のままにおのづから出て来たものが自由である。自由の「自」は自然の「自」と同じ「目」である。みづからの「身」も「おのづから」の「己」もともに自己としての自然である。自由と自然とが峻別されず、道德の領野が生地の地平と理念的に同一視されるのが日本の道德の特色である。

（『日本的性格』）

近代日本を代表する二人の思想家の以上の言葉に明らかなように、ここには日本人の思想文化一般の基本発想ともいふべきものが、「自然」ということにおいて要約されて語られている。「自然法爾」あるいは「おのずから」を理想に、それへの「融合相即」を自己否定的に求めるという——「西洋の觀念形態」とは明らかに異なる——こうした基本発想のなかで日本人は独自の思想文化を営んできたのである。

こうした基本発想の枠組みのなかで、一方では寛ろやかでゆたかな独自の思想文化を育ててきたのであるが、しかし同時にそれは、曖昧で雑然とした思想文化でもあるという批判を生みだしている。

今、日本的「自然」について考えるということは、こうしたプラス・マイナス両様にわたるわれわれの思想文化の伝統をどう受けとめるべきかを考えるということでもある。

さきに一般的に述べたように、こうした日本的「自然」もまた、ひとつの自然認識、自然観のそれであることはいうまでもない。それが共同体の閉塞した見えない制度として働いているとするならば、それはそれとして厳しく診断する必要がある。それはあらゆる自然認識に適用されなければならないことであらう。

ただその診断・処方、別の自然認識（たとえば九鬼のいわゆる「西洋の觀念形態」のそれ）の借用においてのみなされたり、あるいはそれらとの安易

な折チユウ・混淆においてなされたりするかぎり、すなわち、異質なそれらとの本質的な出会い・対質を介して内から賦活・改革されないかぎり、その批判されるべき事態はしばしの模様替えに留まるにすぎない。それは近代日本がくりかえし実験してきたところである。

そのためにもまず求められることは、日本的「自然」なるものがいかなるものであつたのかを、できるところまで厳密に見定めることである。今それを自明として生きているあり方からはそのことはチユウ出できない。柳田国男の言葉をかりれば、「何が、我々のおのづからであつたかということは、やはり辛苦して是から搜し出すの外はない」といった、それ自体逆説的な営みがそこには要請されている。

ここで問題のシヨウ点を、前節で見た西田・九鬼のいうところの、自己と物、自由と自然、一般的に「みずから」と「おのずから」の「相即」という思想構造に置いてみよう。

西田は、「日本仏教に於ては、親鸞聖人の義なきを義とすとか、自然法爾とか云ふ所に、日本精神的に現実即絶対として、絶対の否定即肯定なるものがあると思ふ」（『場所的論理と宗教的世界観』、傍点引用者）とも述べているが、つまりその問題は、こうした本来、対立すべきもの（自己と物、現実と絶対、さらには此岸と彼岸、内在と超越、等々）を「即」「不二」「如」というかたちで結びつけて捉えようとする、（かならずしも仏教のそれとは同じではない）ある基本的な考え方への問いでもある。

日本語では、「おのずから」と「みずから」が、ともに「自（か）ら」と表記されてきている。「……することになりました」という、ごくふつうにいう言い方には、「みずから」決断し努力したことでも「おのずから」の成り行きでそう成つたのだという受けとめ方が潜んでいるのである。

それはまさに、九鬼のいうごとく「西洋とはかなり違つてゐる」受けとめ方であるが、そもそもが、このような一般の傾向のあるところで、その「相即」はどう説かれるのだろうか。

まずは手近な具体例から見よう。われわれに親しい小説の方法に私小説というスタイルがある。それは、いわゆる自然主義を名のつた文学者たちが始めたスタイルであるが、その基本的な考え方は、その代表的な作家であつた田山花袋の言葉をかりればおよそ次のような発想に基づいている。

自己を残る処なくさらけ出されて来ると——弱点でも何でも忌憚なく暴露して来ると、それが一種の客観性を帯びて来る。主観を押しつけて行くとき客観になり、客観を押しつけて行くとき主観になるといふような心理作用があると見える。

（『客観といふこと』『卓上語』）

私小説とは、こうした、「主観」と「客観」との「相即」すべき地点において語られている。そしてこの両者を繋ぐ項が、自然主義といわれる、その自然なのである。自己の内に自然があり、それは他者の自然、ひいては形而上的な大きな自然につながっているという確信がそこにある。

「みずから」の身辺に起きたことの日記あるいは雑記のときもの（主観）が「残る処なくさらけ出」されると、それが「おのずから」小説（客観）たりうるとする私小説の「方法」がそこに成り立っている。しかしその媒介項である自然は、いかにその背景に形而上的な拡がりが見込まれているようにとも、それが有効であるのは、基本的に、いわば閉じられた共同体のことである。いつてみればそれは、書き手と読み手との仲間うちでの隠語の文学であり、

その世界を共有しないものには通じないからである。

話がだんだんと文壇ギルドの内輪話とならざるをえなかったゆえんであり、そこではいかに現状破壊・現状暴露が叫ばれようとも、それらがやがてその閉じられた自然・共同体のなかに呑み込まれていかざるをえなかったゆえんでもある。

「真実なれ、自然なれ」とのモットーにおいて彼らが「さらけ出」そうとしたのは、たとえば象徴的に花袋の出世作「蒲団」の例でいえば、師であり妻帯者であった主人公の女弟子に対する愛欲、またその無様なまでの未レン⁽⁵⁾といったたぐいのことであった。そしてそうしたことを「さらけ出」すことよってなされた総括は、「矛盾でも何でも為方がない。その矛盾、その無節操、これが事実だから為方がない。事実、事実！」(「蒲団」)、「人間の浅ましき、……けれどこれが人間である。これが自然である。」(「生」といった聞き直りの容認であった。

多少意地悪にいえば、そこにはその具体的状況を担う自己もなければそうした自己と緊張すべき自然もない。あるのはただ自己と無媒介に癒着した「事実」であり「自然」である。そこではその自然主義とは、自己弃護ないし現実の無条件容認主義に墮しているのである。自己と自然の「相即」の悪しき例がここに見られる。

むしろ、近代日本のある種の「誠実」の表現でもあった自然主義文学をこうした側面だけで断罪することはフェアではない(そこにはそこでのみ可能であった思想意義も十分にあった)し、またそれは自然主義文学だけが負うべき責めではないだろう。

彼らの陰惨な自然概念を真つ向から批判した「白樺派」にしても、その高邁・向日的な姿勢を支えていたものが、自己と自然とのあっけらかんとした連続性であるかぎり、(また事実そうであったがゆえに結果的には自然主義文学とは同様の事態に陥らざるをえなかったのであるが、その意味では)同罪というべきであろう。

そしてまた何よりそれは、そもそもそうした文学を享受し共感してきたわれわれ自身の内なる問題でもある。「……することになりました」という言い方が、「みずから」の決断や努力もすべて飲み込むように、「おのずから」の成り行きでそう成ったのだとだけ受けとめ語られるときには、その当人は決してその結婚や就職には責任はとれないからである。

そこには、「みずから」と「おのずから」、自己と自然、またひいては自己と他者との暗黙のうちでの同一性・連続性が前提されているのであって、そうしたあり方が、甘えとも無限抱擁^{ほうよう}とも、また「無責任の体系」とも惰性化として働く「見えない制度」とも批判されてきたところのものである。

以上のようなあり方は、「みずから」のあり方を「おのずから」へ解体・解消し、しかも「おのずから」を「みずから」の属する共同体にとりこみそれを閉じたかたちで固定化した、いわば硬直した物語・制度としてのそれである。

竹内整一、「おのずから」と「みずから」 日本思想の基層、筑摩書房

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|----------|------|------|------|------|
| (1) キュウ屈 | ① 無窮 | ② 究極 | ③ 配給 | ④ 旧態 |
| (2) 折チユウ | ① 円柱 | ② 誅殺 | ③ 衷心 | ④ 仲裁 |
| (3) チュウ出 | ① 忠臣 | ② 抽象 | ③ 宇宙 | ④ 铸造 |
| (4) ショウ点 | ① 省略 | ② 掌中 | ③ 抄出 | ④ 焦眉 |
| (5) 未レン | ① 煉獄 | ② 錬磨 | ③ 練習 | ④ 連絡 |

問二 傍線部A「今あらためて、『自然』が問われている」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 前世紀初頭の思想の重要な課題であった「神の死」から、二一世紀におけるそれは「人間の死」「人類の死」という課題に取り組むことになったといえるが、その過程で「自然の死」が必然の課題となり、「自然」に対する問い直しが求められている、ということ。
- ② 人間の理性によつて有意味的に秩序づけられてきた「コスモスとしての自然」の解体が危機的に進行しているという認識のもと、絶対的な根拠として前提されていた「自然」の不在が感知されており、その「自然」が問い直しされている、ということ。
- ③ 「コスモスとしての自然」という従来の自然観・自然認識において捉えられてきた「自然」は、「人間」とのある種の一体感の中で理解されており、「人間の死」といった終わりへの「予感」が、この自然観の変更を求めている、ということ。
- ④ 二一世紀に入つて地球規模の環境破壊がとにかえしのつかないところまで来ているという否応ない認識に立って、この地球の有限性を事実として受け入れ、「思想の死」という課題を「自然」において問い直す必要がある、ということ。

問三 傍線部B「そうした近づき方」の内容を説明したものととして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 自然それ自体は、われわれにはついに見知らぬ向こう側としてあるという、知の限界、無知の知を前提としてもって向き合うという方法。
- ② 人間の理解する自然とは、それぞれの自然観・自然認識において捉えられ語られた自然であつて、自然の全てではないと思考する方法。
- ③ ニーチェの響^{きこ}みに倣えば、常にそれが「誤謬」であるかもしれないと留保しながら「真理」(「誤謬」)を見いだすという方法。
- ④ 名詞「自然」は、「偶然」や「突然」と同じ副詞として、「おのずから」と同義に使われていた前提を踏まえて理解する方法。

問四 傍線部C「日本人の思想文化一般の基本発想」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 主体と自然という構造においては自己自身を肯定しつつも、「おのずから」など、どこに道徳が成立する日本人の自然観をいう。
- ② 自然と自由とを「対立」の構造という文脈で理解し、「おのずから」な自然に大きな意味を見出すという思想文化の考え方をいう。
- ③ 自然と自由とを峻別し、自然と人事を明確にすることで「おのずから」と「みずから」を区別する日本人の基本的な自然観をいう。
- ④ 「自然法爾」あるいは「おのずから」を理想とし、それへの「融合相即」を自己自身の否定を通して会得するという考え方をいう。

問五 傍線部D「それ自体逆説的な営みがそこには要請されている」の内容を説明したものとして適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 日本的な「自然」もまたひとつの自然認識、自然観であるが、これを理解するためには、別の自然認識、例えば九鬼周造の「西洋の観念形態」を借用して厳しく診断しなければ相対的な理解にいたることができない構造があり、それへの省察が求められている、ということ。
- ② 日本的な「自然」とは本質的に異なる自然認識と出会い、相互の自然認識についての了解を経ても、その新しい知見をもって活力を与えることができるのであれば日本的な「自然」は消滅してしまう危険性があるが、時代がその消滅を求めている、ということ。
- ③ ひとつの自然認識、自然観のその表れである日本的な「自然」を自明として生きているありかたにおいては見出し得ない、何がわれわれの「おのずから」であったかを探し出さねばならない、という省察が求められている、ということ。
- ④ 日本的な「自然」に対する考察は近代以降くりかえしなされておき、厳密に見定められた結果、このような自然認識、自然観は共同体の閉塞した見えない制度として働いていた事実を認めさせようとしている、ということ。

問六 傍線部(a)「自然主義」・(b)「白樺派」について、それぞれについて以下の各問いに答えなさい。

設問一 それぞれの代表的作家として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 夏目漱石
- ② 島崎藤村
- ③ 川端康成
- ④ 有島武郎

設問二 設問一で選んだ作家の代表作品として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「家」
- ② 「或る女」
- ③ 「雪国」
- ④ 「それから」

問七 傍線部E「自己と自然の「相即」の悲しき例」の内容の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 自然主義の小説の方法としての「私小説」というスタイルが、書き手と読み手との仲間うちでの隠語の文学へと変貌したことで、その世界を共有しないものには通じない閉塞した共同体の制度と同等のものになってしまった残念な実例となった、ということ。
- ② 自己と自然の「相即」とは親鸞聖人の義なきを義とすとか、自然法爾という、現実を絶対とし、かつその絶対の否定をただちに肯定するという結びつきをいうが、自然主義における「自然」と「現実」との間にこのような結びつきが理解されなかった、ということ。
- ③ 日本語では「おのずから」と「みずから」がともに「自(か)ら」という同一の表記がされてしまうことで、「おのずから」と「みずから」の区別が曖昧となり、「おのずから」なる自然と「みずから」なる自己との境界が曖昧となる機縁となってしまう、ということ。
- ④ 自然主義の「真実なれ、自然なれ」とのモットーも、田山花袋の「蒲団」が象徴するように、作中で「さらけ出」されたのは、自己と無媒介に癒着した「事実」であり「自然」であるという、現実を自然として無条件に容認する「開き直り」に堕してしまっている、ということ。

問八 傍線部F「情性化として働く「見えない制度」とも批判されてきた」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「みずから」と「おのずから」について暗黙のうちに前提として同一性・連続性を認め、自己の責任を問えない仕組みになっているから。
- ② 自然主義に対する現状破壊・現状暴露がなされてきたが、それらの批判は文壇ギルドの内輪話として吸収され消滅してしまったから。
- ③ 自然主義の陥った自己と無媒介に癒着する自然という関係性は、白樺派もまた継承している点で自然主義のみの欠点ではないから。
- ④ 「みずから」のあり方を「おのずから」へ解体・解消することで、共同体における「みずから」が物語り化してしまったから。

問九 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 地球の環境破壊がとりかえしのつかないところまできているという否定的な認識が、終わりへの「予感」をもたらしているという側面がある。
- ロ 西洋の観念形態では自然と人間とは対立するものであり、両者の「融合相即」を前提とする日本人の思想文化を理解することは不可能である。
- ハ 田山花袋は私小説について、自己を忌憚なく暴露していくと一種の客観性を帯びてくること、主観をおしつめると客観に、客観をおしつめると主観に、と主観と客観との「相即」において捉えたが、この両者を繋ぐ項が自然主義といわれる自然であった。

ニ 白樺派は自然主義における自己と自然との無責任な癒着を批判し、陰惨な自然概念を真っ向から批判したが、その白樺派であっても、自己と自然との同一性・連続性という前提を問い直すには至らなかったため、日本の文学は「無責任の体系」と評価されることになった。